

小竹貝塚とシジミ

会員 奥川光治

2 年前のことになりますが、富山県埋蔵文化財センターの特別展「BONE 骨ー貝塚で知る生命の証ー」を観覧する機会がありました。2009～2010 年に、北陸新幹線建設に先立って発掘調査が行われた小竹(おだけ)貝塚の出土品を中心に最新の研究成果が紹介されていました。

小竹貝塚は、呉羽駅のすぐ北にあります。呉羽丘陵と射水平野の接点に位置していて、約 6,000 年前の縄文時代前期後葉を中心とする 500 年間営まれたとされています。現在では、海岸線から 4 km 離れていますが、当時は縄文海進の影響で貝塚のすぐそばまで海水と淡水が入り混じった汽水性の潟湖が広がっていたと考えられています。この潟湖の名残が放生津潟で、1968 年に富山新港へと変わりました。

小竹貝塚の出土品には、貝殻のほか 91 体の埋葬人骨、シカ・イヌ・イノシシなどの陸上動物の骨、スズキ・クロダイ・フナ・コイ・サケなどの魚類の骨、カモとカイツブリなどの鳥類の骨、イルカやクジラなどの海棲哺乳類の骨、骨で作った道具とアクセサリーなどがあります。

なかでも私が興味を持ったのは貝の種類です。出土した貝のほとんどがヤマトシジミで、縄文前期後葉には約 99%も占めているということです。ヤマトシジミは汽水性で、スズキ・クロダイも含めて汽水域の豊かな漁獲が生活の糧になっていたことがわかります。ヤマトシジミに次いで多い貝は淡水性のオオタニシとイシガイで、これらも食用として利用していたと考えられています。海水性のサザエ・カキ・ハマグリ・サルボウガイも出土していますが、数は少ないということです。

日本の在来種のシジミには、ヤマトシジミと淡水性のマシジミ、セタシジミがいます。セタシジミは琵琶湖の固有種です。また、外来生物法で要注意外来生物に指定されているタイワンシジミは淡水性で、食用として輸入されたものが放流されて広がり、マシジミと交雑して区別ができなくなり、問題となっています。

現在、ヤマトシジミの漁獲量が多いのは、島根県の宍道湖、青森県の十三湖・小川原湖、茨城県の涸沼(ひぬま)などで、農林水産省の統計によると、全国の漁獲量は年間 9,000 t 程度です。1960 年代後半には 50,000 t を超えていたので、5 分の 1 ぐらいまで減少したことになります。1960 年代に干拓事業が行われ、残存水域が淡水化された八郎潟や河北潟、港湾建設のため海水化された放生津潟でも、汽水の時はヤマトシジミの漁が行われていました。放生津潟でのシジミの漁獲量は、記録の確認できた 1954 年から漁が行われた最終の 1964 年まで年間 20～160 t となっています。

八郎潟では、淡水化後ヤマトシジミはいなくなり、閉鎖性水域となって水質汚濁が進行してアオコの発生が問題となっていました。1987 年の台風時に数日間海水が浸入したのをきっかけにヤマトシジミが大発生、5 年間アオコの発生が止まり、水質は大幅に改善するという経験がありました。その経験を踏まえ、水環境改善と経済循環、食糧供給サイクルの新たな創出を目標に、一時的、部分的な汽水化・ヤマトシジミの回復という提言がされ、検討されています。

富山新港では再汽水化の困難さと『富山湾』Vol.8 で報告したように底質汚染を考えるとヤマトシジミの復活は夢物語ですが、八郎潟や河北潟、その他可能性のあるところではヤマトシジミの回復、豊かな食文化の復活ができないものかと思い巡らしています。

参考文献

近藤正(2020)八郎湖の負荷収支からみた汚濁構造と水質・水環境改善への課題、河北潟総合研究 23。

富山県埋蔵文化財センター(2015)小竹貝塚ー6,000 年前のともまのくらしー。

富山県埋蔵文化財センター(2020)令和 2 年度特別展図録。



写真 1 北陸新幹線高架下の小竹貝塚跡。縄文時代前期としては全国最多となる埋葬人骨が出土したが、解説看板と音声ガイダンス機器があるのみで少し残念。



写真 2 貝層はぎとり資料(富山県埋蔵文化財センター)。センターでは常設で小竹貝塚を展示している。